

【ねがいましては】

平成23年4月7日

KYOWA SCHOOL

第245号

「信頼その1」

「子どもたちに最も強く伝えたいことは？」と問われたら、真っ先に「信頼」とこたえます。

今までの【ねがいましては】でもたびたび取り上げていますが、落ち着き先が「信頼」になります。

子にとって100%の強い信頼を受けているのは、紛れもなくお母さん、お父さん。そしてご兄弟、親戚の方々。

いずれにせよ、血縁関係にある方々が筆頭に上がるはずです。

生を受け、真っ先に会おう方が母親、そして父親。この関係は強制と言っても間違えはありません。子は目の前の人に100%の信頼を寄せ、すくすくと育っていきます。母の表情は、子に絶大な安心感を与えます。どんな危険な目にあっても、きっと母が救ってくれる……。子は成長しようとする本能を十分に生かしながら、すくすくと育っていきます。

そして危機が訪れます。学校での勉強が、子に危機感を与え始めます。今まで悪い事をすれば確かにしっかりと叱ってくれていた母。誰がどう考えても悪い事は悪い。叱られるのは当たり前。逆に叱られないようなことがあると、子は寂しさを覚えます。

成績が、子と親との間にあった「信頼」を徐々に削り始めます。叱られる内容に納得がいかない場面が多くなります。

取りたくて取ったのではない点なのですが、一番傷ついているのはテストを行った本人。その心情を100%理解してくれるはずのお母さんが怒っている。「おかあさんは私にとって一番の理解者であったはずなのに……。」

信頼で埋めつくされた子のこころは、やがて1枚、2枚……と、はがれていきます。

そこでその信頼を削らないような訴え方はないものか。母としてどうしても感情が先に出てしまいがちになってしまう学校での成績。

まずお母さま方にお知り置きいただきたいことがあります。人が生きていくこととはどういうことなのか。生まれた瞬間、オギャーと言って、精一杯の声を張り上げて誕生した。寝る時も精一杯の寝顔を見せ、乳を飲む時も精一杯に飲む。「とにかく生きまっせ！生かさせていただきます。」という勢いがあった。やがて子は歩くことを覚える。というより子はとにかく走りたがる。小さければ小さいほど、子は走っています。子どもは走るのが商売。それを走るなど叱るのは親。なぜなら周りへの迷惑に配慮しての叱り。しかし、社会のルールなど知らない子にとっては走るのが商売。これは本能からやってくるはずの行動であって、より強い筋力をつくるための行動です。小さい子の落ち着きがない、よく足をぶらぶらしたり、体をせわしなく揺らしてみたりなどは、これすべて体力増強への本能的行動です。

医学的に解釈すれば、未発達な心臓君が体中に元気な血液を送るためには、まず体を動かすこと、そうすることによって心拍数が上がり、体全体に勢いよく血液が流れ始めます。本能が体を成長させようとして働いているわけです。

心拍数が落ちると体全体に元気な血液が行き渡りませんので、体は徐々に衰えてゆく。そうなたまると、子はせせと体を動かします。走るのもその現れなのです。

そのようにして「生きまっせ」という前向きな行動が、いざ勉強になると逆転します。前向きが後ろ向きに……。

学校の勉強に対して勢いが感じられない。これが母のキレる原因のほとんどだと思います。そして先を考える。「このままだと……。」不安が母によりぎります。イライラ → ドカーン。子は先など考える能力を持っていません。ただ目の前のいやなものから脱したいだけ。

勉強の面も走ることも、子どもたちにとっては同じこと。かけっこして1番もあればビリもある。でも精一杯に走ったのなら「よくやったね。」とほとんどの親は褒めているはず。来年はビリ脱出だなどと励ましています。走った内容について、事細かに叱っている方はあまり見かけません。「もっとひざを高く、うでを大きく……。」

で、テストや成績、「あんたこんな簡単な問題、なぜできないの！」

ほぼこれが決めての一言になり、今までの信頼は大きく削り取られます。と同時に子の中にあった安心感も削られます。信頼を削られた子の中には、代わりに不安定なところが宿り始めます。勉強に対する不信感は、さらに大きくなっていきます。悪循環が広がります。子どもの中に、あるひとつの思いが現れます。「勉強のせいだ。」

勉強は敵になります。母との間を切り裂いた悪人なのです。

一度恐怖心を身につけた子は、なかなか勉強に対する不信をなくすることができなくなります。

子は待っているのです。お母さんがそばにいる、何度間違えても、あのやさしい表情はなくなりません。

「さっ、もう一回、いっしょにやろうね。ゆっくりと……。」

子が母を見て、ニコッとした瞬間、不安は徐々になくなっていきます。やがて自ら机に向かうようになります。

いや、リビングテーブルで向かうようになります。だって、いつもお母さんにそばにいてほしいからです。

私は男なのですが、その想いを必ず子どもたちに向けるよう努めています。

今日も言い続けます。「精一杯に向かえばそれが100点だよ、間違えなかったらわかるようにならないよ。」

もうひとつ、「となりの人と、そっところの手をつなごうね。」